
魔法少女リリカルなのは～神の化身～

サンライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 神の化身

【Nコード】

N7466R

【作者名】

サンライト

【あらすじ】

あるところに通りすがった少年と、命を救われた少女。二人が再び出会うとき物語が動き出す。

*この作品は、いろいろなアニメの一部（人物像や技、セリフなど）を使用しています。苦手な方は、ご遠慮ください。

プロローグ「雪の世界で」(前書き)

初投稿の作品です。

駄文ですが、ご了承ください。

プロローグ「雪の世界で」

ここは、とある白き雪世界。そんな中に一人の少年がいた。

「ふう。こんなものか。」

少年の持っていた袋の中は、色とりどりに輝く鉱石が入っていた。

「んにしても、さつきから何の音だ？」

そう、少年がいるところから近いところで、何か爆発音がするのだ、
・・・が、彼はというと、

「・・・せつかくだし、行ってみるか。」
と、いう始末である。

そついうと彼は、その場から消えた。

seidなのは

今日は、ヴィータちゃんつと部隊の人たちで、ある世界での任務
につています。

「特に何も無く終わったな。」

そういうのは、少し離れたところにいたヴィータちゃんだった。確かに、何も無かったけれどそんなに暇そうに言っのはね……。と、思ったとき、

「未確認物体（アンノウン）を発見、攻撃の意思があるようです！」
そう言われて、隊員さんの方を向くと、まるで蜘蛛のようなロボットが、こちらに攻撃を仕掛けてきた。

「いくぞー！なのは！」

「うん！」

そうヴィータちゃんに返事をして、私たちは、アンノウンの撃退を始めた。

〳数分後〵

私たちは、アンノウンを撃退して、ヴィータちゃんは通信をするために、隊員さん達と一緒にいます。私は、少し離れたところで休んでいます。

「ふう〵。なんか疲れたなあ〵」

何故か最近、私は疲れやすくなっていたような気がしました。

・・・それがきのせいでは無いことなど、このときの私が知る由もなかったのです。

ドッッ。

その時まで……。。

s i d e ヴ ィ ー タ

あたいは、本部に連絡するため少しなのはから離れた。
後で、それを死ぬほど後悔するとは、思わなかった。

ドッッ

その音がするまで。

s i d e o u t

ドッッ。

その音がした瞬間、その場にいた者が見たものは、

「うつ・・・」

苦しげな声をあげるなのはと、

「ぐちゅ・・・」

なのは突き刺した、先ほどのアンノウンだった。

「・・・っ！なのは！！！」

いち早く理解したヴィータがなのはを助けに向かうが、行く手にほかのアンノウンが現れた。

まるで、邪魔をするかのように。

「ちっ！どけえー！！！！！」

ほかの隊員も援護するが、なかなかなのはのもとに行けない。きずくと、なのはは地面に転がりアンノウンがとどめを刺そうとしていた。

「なのは・・・！やめろー！！！」

ヴィータが叫ぶ中、武器の付いた腕が振り下ろされた。

ガキイイイン。

はずだった。

「なんか知らんが、間に合ったようだな。」

謎の少年が、攻撃をとめていた。

s i d e o u t

謎の少年は少女なのはの前に立ち、真っ赤な龍の形をした大剣を使ってアンノウンの攻撃を防いでた。そして、止めながら少年は少女に尋ねた。

「おい。生きてるか？」

「……とてもこんな状況で言うセリフではない。」

「だ……いじょうぶ。」

「……なのはおなのである。誰が見ても、大丈夫ではない。そうか……んじゃ。」

と、いうと少年は軽く剣をふるい、アンノウンを切り飛ばした。そして、こう言った。

「……この指とまれ。」

……と、いうと向こう側で戦っていたヴィータがそこにいた。「っ！……で、なのは？！」

驚きつつも、なのはに駆け寄るヴィータ。それを見た少年は、なのはをまかせてアンノウンに向き直った。

「モード・ツバイ。」

『モードツー。バズーカモード。』

すると、龍の口の部分から出ていた刃が引っ込み砲身が現れた。

『ロードカートリッジ。』

ガシュン、と音をたてて薬莢が排出される。

「散弾モードで装填。」

『了解、散弾装填。発射準備完了。』

「……発射あああ！！！」

すると一つの魔力弾が発射され、途中でばらばらに飛び散りアンノウンをすべて破壊した。

プロローグ「雪の世界で」（後書き）

次回・「約束と別れ」

第一話「約束と別れ」(前書き)

第一話です！

第一話「約束と別れ」

目が覚めるとそこはベッドの上だった。

「・・・っ！」

起き上がろうとすると、ものすごい激痛を感じる。なのでずっと天井を見てると。

「「なのは(ちゃん)。」「」

と、言いながら二人の女の子が入ってきた。その二人は、

「・・・フェイトちゃん、はやてちゃん。」

私の大事な友達、フェイト・テストロツサ・ハラウンことフェイトちゃんと、八神 はやてことはやてちゃん。

・・・そっか、私落ちたんだっけ。

「なのは、大丈夫？」

「・・・いや、大丈夫やないと思うけど、具合はどうや？」

「大丈夫だよ、・・・たぶん。」

「今、たぶん言ったやろたぶんで!!!」

ううゝ、でも体はまだ痛いけど、変な感じもしないし・・・。

「・・・まあ、元気そうでよかったよ。」

「ほんまやゝ、相変わらずなのはちゃんの頑丈さにはあきれるわゝ。」

「」

「???」

何のことかと思い聞いてみると驚いた。

なんでも胸を一突きされたはずなのに、病院についたときにはほぼ完ぺきな措置がされていたそうだ。

ほかの局員曰く。

「「「あいつだ。」「」」

とか、その人については二人とも聞いていなかったようだ。すると、

「目え覚めたってホントか?!なのは!」
ヴィータちゃんが入ってきた。

その後、ヴィータちゃんを落ち着かせと後、その時のことを聞いた。それによれば、意識を失う前に見たあの大剣の持ち主が助けてくれて、その後に何か見慣れない魔法を私にかけると、その場を去ったらしい。ヴィータちゃん達も追いかけたが途中で見失ったとか。
・・・とても残念です。

30分ほど話した後、三人は帰りました。

「・・・」

そしてまたばーっとしていると、何か視線を感じ私がそちらを向くと、
「・・・調子はどうだ?」

赤いフードつきのマントをかぶった、一人の少年がいました。しかし、私はそれよりもその少年が持っている物に目が行きました。

「・・・もしかして、あの時の?」

「・・・ああ、そうだ。」

そう、彼はあの赤い龍の大剣を背負っていたのだ。

「あ、あの、お礼が言いたかったんだ。・・・あの時助けてくれてありがとう。」

「いや、いいさ。俺も関係ないからと言って死にそうなやつを見過ぎすほどの残酷な人間じゃないし。」

「うん。．．．それでも、ありがとう。」

「．．．んじゃ、どういたしまして、でいいのかな？」

「うん！」

私がそう言うと、その人は少し微笑んだ。

「／／／はう／／／」

その笑顔は反則だよ．．．。

「？大丈夫か？」

と言って顔を覗き込んでて．．．はわああ／／／！！！！

か、顔が近いよ／／／／／

「だっ、大丈夫だから／／／／／。」

さすがに、見とれてたなんて．．．／／／／／

「んじゃ、いくか。」

「えっ？」

そしてその人は、窓の方へと歩いていく。

「待って！」

思わず叫んだ。

「名前、．．．名前はなんていうの？私はなのは、高町 なのはっ

ていうの。」

「ジャ．．．」

「ジャ？」

「ジャンゴ．．．」

「ジャンゴ？」

「ああ、ジャンゴ・フェニックス、変な名前だろ？」

「確かに変わってるけど、いい名前だと思うよ。」

私がそういうと、少し驚いた表情をしていた。

「？どうかした？」

「．．．いや、初めてそう言われたからさ．．．。」

そうつぶやくと、窓の方を向き、私にこう言った。

「じゃあなのは、元気だな。」

「うん、ジャンゴ君も。またいつか会おうね。」

「ああ、約束だ。」

そう言っで、彼は窓から飛んで行った。

第一話「約束と別れ」(後書き)

次回「機動六課」

第二話「機動六課」(前書き)

今回からあとがきトークがあります。

では、どうぞ！

第二話「機動六課」

side はやて

・・・ん？

ああ！こんにちは、機動六課部隊長八神はやてです。

機動六課も動き始めて二週間、うちの部隊のフォワードもなのはちやんのおかげで先のリニアレールでのロストログア「レリック」確保もでき、とても順調です。

んで今、私は何をしてるかという・・・。

「・・・ん。」

「どうしたんですか？はやてちゃん？」

今話しかけてきたのは私のユニゾンデバイス、リインフォース・ツバイ小さいけど私の優秀な副官でもあるんよ。

「いやゝなリイン、この部隊の隊舎の端に艦の停留場があるやろ？」

「はい。それがどうしたんです？」

んゝ、そこなんよなゝ・・・。

「リインも聞いたことはあるやろ、時空管理局協力軍隊・アルバード って部隊。」

「はいはい！なんでもすぐ強くて魔力のない人でも戦えるような装備と技術を兼ね備えた部隊ですよね！」

といつて、空中でピョンと跳ねるリイン。・・・なごむなあゝ。

「そや。で、そのアルバード隊が物資の補給とかでここを使わせてほしいって言ってきたんや。」

「すごいじゃないですか！！・・・あれ？そういえば、その部隊の本部もミッドにあるんですよね？」

「うん。でもなんか工事中らしくてなゝ、うちの部隊に出向という形で行かせてもらえるかやって。」

なんともまあ、・・・でもこつちとしてはラッキーやけどな。

「ということで、明後日には来るらしいからな、挨拶に来るらしいから隊長たちにもいっというてな。」

「わかりました〜!」

・・・さて、どんな人たちやる。・・・嫌な人でないことだけ願うと。」

side ???

ここが、機動六課ですか〜。

海も近いですし、いいところですね〜。

・・・えっ! ??? じゃよくわからない?

えっと・・・それじゃあ、ここの部隊長との挨拶の時に一緒にします。

side out

そして、ここは六課部隊長室、ここにいるのは、

「悪いな、急に呼び出して。」

この部屋の主、八神はやてと、

「ううん、ちょうど訓練も終わったとこだったし。」

「私もはやてに報告書持っていくとこだったから。」

機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉と、ライトニング分隊隊長フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官である。

そう、今ははやてが呼び出したのである。

「それで、その人は？」

「うーん・・・、もうすぐやと思うんやけど。」

フェイトの問いに答えるはやて。そとそこに、カウンターから連絡が入り、その人物が到着したと伝えた。

「・・・ほな、二人ともええか？」

「・・・（コクリ）・・・」

さすがのこの三人も、相手が相手なので緊張しているようだ。

ピー

と、扉のブザーが鳴った。

「失礼します。」

そして、一人の女性が入ってきた。

「時空管理局協力軍隊アルバード大将艦ブルーインパルス所属、魔導師部隊隊長佐伯真央少将です。」

・・・何とも長い自己紹介だ。

「時空管理局地上部隊機動六課部隊長八神はやて二等陸佐です。このたびは協力感謝します。」

「機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉です。」

「同じく六課ライトニング分隊隊長フェイト・T・ハラOWN執務官です。」

・・・こちらもなかなか負けない長さだ。特にフェイトは名前が長い。

グッサーー!!

「（どうしたの、フェイトちゃん？）」

「（・・・何か分からないけど、誰かにすごく気にしてるって言われた気が・・・。）」

「???」

そんなんで落ち込んでるフェイトを見て、どうしたのか?と思う真央だった。

side なのは

「それでは、これをお願いします。」

「了解や。こちらもよろしくな。」

あれから数分話すと、真央さんはとてもいい人でした。しかも同年だったので普通でいいといわれました。・・・ただ真央さんは、何か口癖なのか人のことを「さん」づけで読んでしまうらしいです。あつ、そうだ。

「あの、真央さん。」

「はい。なにですか？」

「よかつたら、訓練見ていきませんか？」

もしかしたらいいアドバイスをもらえるかもしれないし。

「そうですね・・・とくに用事もないですし、ぜひお願いします。」

よし！んじゃさっそく、

「それじゃ、こちらです。」

s i d e o u t

s i d e ティアナ

こんにちは、ティアナ・ランスターです。

えっと私たちは今、午後の訓練のため訓練場の仮想シュミレーターでじゅんびうんどうをしています。

「って、サボってないでアップしなさいスバル！」

「うん、そうだけど遅いねーなのはさん達。」

「確かにそうですね。」

「そういえば、八神部隊長のところに行くとか言っていたような・・・」

えっと、上から訓練校からの腐れ縁のスバル・ナカジマ二等陸士、チツビ子のエリオ・モンディアル三等陸士とキャロル・ルシエ三等陸士ね。

「部隊長のところっていうことは何かあったのかしら。」

そんなことを言っていると、

「みんなー、待たせてごめんねー。」

なのはさんがやってきた、・・・誰かを連れて。

「いいえ、それよりもそちらの方は？」

「あつ、紹介するね。」

そういうと、その女性が一步前に出て、

「明後日からこちらに出向することになりました。・・・（以下省略）」

「・・・」

「・・・誰からも声が出ない、って当たり前でしょー！！！！あの『アルバード』っていったら誰でもびっくりするわよ！！！」

「・・・そんなに驚かなくてもいいじゃないですか・・・」

「・・・すつ、すみません。」

なんかなのはさんが「あちゃー、先に言っておけばよかった。」とか言ってるけど、もう遅いですよ。

「・・・えー、あとあまり気にしなかったことにするので、気軽に話しかけてください。」

「「「・・・はい。」」」

「気にしなかったことにできるか?とも思ったけど、ッッ」まない」とにした。

「それじゃ、午後の訓練始めるよー!」

「「「はい!」」」

s i d e o u t

第二話「機動六課」（後書き）

作「と、いうことであとがきトークタイム!」

ジャ「ようやくだな。」

作「まあね、まずはどうしょ?」

ジャ「おい!計画性ないのかよ!」

作「・・・すみません。」

ジャ「そういえば、初めるときにネタを入れたな。」

作「何だっけ?」

ジャ「打つ時の『・・・発射ああ!!!』だよ!」

作「おお!忘れてた!たしか、ガンダムのガロードか?」

ジャ「書き始めてまだ五日目なのに大丈夫か?」

作「大丈夫だ!問題ない!」

ジャ「問題だああ!!」

作「さてこんな感じで進んでいくのでよろしく!」

ジャ「・・・次回『訓練と弾幕』って、これなに?!」

第三話「訓練と弾幕」(前書き)

第三話です！

それではどうぞ。

第三話「訓練と弾幕」

side 真央

ただいま六課の訓練を見せてもらってるのですが……。

「はあああ!!」

「……あんなにまっすぐ突っ込んだら

「あゝれゝ?!」

「……やつぱり流された。

「クロスファイヤー、シュート!」

なかなかコントロールはいいけど……、

「アクセルシューター!」

『アクセルシューター』

「シュート!」

「なっ!」

「……まだ数が足りないですね。」

「でえりいやああ!」

この子は、

「ふん!」

ガキン!

「うわあ!」

もう少し、筋力をつけたほうがよさそうですね……。

「えっ、えっと……。」

この子はもう少しか攻撃手段があったほうがよさそう……。

と、いう感じです。

「それじゃ、ここまで！」

あつ、終わったようですね。

「皆さんお疲れ様。」

「「「あ、あり・・・がとうございます・・・。」」」

なんか、可哀想に思ったのはなぜでしょう？

「あの、よかったらこの子たちにアドバイスはありますか？」

「・・・そうですね。」

s i d e o u t

s i d e スバル

今日の訓練はあのアルバードの人が来ていて少し緊張したけど、優しそうな人でよかった。

それで今アドバイスを受けるんですけど、どういつのか楽しみ！

「まず、スバル。」

「っ！はい！」

いきなり私だあー！

「スバルは攻撃力は申し分ないのですけど……」

と、そう言つて私のほうを申し訳なさそうに見てきました。って、なにー?!

「……その攻撃が当たらないので、今のところ一番悪いかと……」

・・・ええええええええええええ！！！！！！！！！
そうなのー！！！！！！！！

その場へたり込んでしまった。

「あつ、あのだねなのは『今』なので、これから頑張れば……ね？」

「ホントですか！！！！！」

「はい。」

よつ、
よかつた・
・
・
・
。

Side out

Side ティアナ

どうにかスバルは立ち直ったようね。にしてもなかなかの辛口コメントーターのようね、私も覚悟しなきゃ、・・・凡人だし。

「次はティアナ。」

来た！

「はい。」

「ティアナは弾丸の形成やコントロールがうまいから、後は一回に操作及び形成できる球の個数を増やすことですね。」

「・・・えっ?!」

たったこれだけ?!

「あつ、そうだ！よかったら、今度ティアナに何か教えてもいいですか?」

「ん? いいですよ?」

ちよつちよつちよつ、ちよつとー?!

「いいなあ、ティアナだけ。」

いやいや、そんな軽く言ってる場合?!

「い、いいんですか?!」

「はい!! 鍛えがいがありそうですし!」

即トー!!・・・でも得したかも。こんなすごい人に認めてもらえたのだし。

s i d e o u t

side エリオ

やっぱりティアさんてすごいですね。あの人に認められた感じがします。

「次、エリオ。」

「はい！」

どういわれるのかな・・・。

「エリオはまだ体の筋力がないので、筋力を上げるといいと思います。でも、成長に支障をきたさない程度にね。」

「はい！」

・・・よし、頑張ろう！！

「あつ、あと。」

ん？

「よかつたら、槍術を教えましょうか？」

「えっ?! 真央さん、槍を使うんですか!」

「はい、なのでどうかと。」

「お願いしますー!!」

やったー!!

side out

side キャロ

みんなすごいなー・・・。

「そして、キャロ。」

「は、はい！」

「キャロはサポート系の魔法はよく出来てたけど、フルバックとしての攻撃魔法がなくて、よく何もできない場面があったから、そういうのを覚えるといいよ。」

「はい！」

そっか、頑ばろ

「あと・・・、はいこれ。」

「????、何ですかこれは？」

もらったのは、エリオ君のストライダーみたいな腕時計でした。

「それは、『バトルチップリーダー』っていうの」

「・・・?どう使っんですか？」

「えっとね。」

そうして、その使い方を教えてもらいました。

side out

s i d e なのは

何かをキャラコが貰ったようだけど、なんだろう？

「なのはさん。」

「どうしました？」

「実はですね。・・・」

どうやらキャラコが貰ったものを試したいとか。で、私がその相手。

「それじゃ、行くよキャラコ。」

「はい！おねがいします。」

そうして始まった。

s i d e o u t

なのはは空中でキャラロの出方をうかがっていた。

「キャラロ、先攻どうぞ。」

なのはが先攻を譲った。

「では・・・」

そういうとキャラロは腕時計に手を添えて、

「バトルオペレーション・セット」

『イン』

すると、時計のところからブレードのようなものが出てきた。

「サポートバトルチップ《ゼロ・ウイング》スロットイン！」

ブレードの接続部から光が出てブレードの上に動いた。すると、

バサアア...

「うわぁ・・・」

「きれい・・・」

「す、すごい・・・」

キャラロの背中に白き翼が生えた。

「（ほら、キャラロ次）」

「（はい!）」

「攻撃用バトルチップ《バルカン》スロットイン！」

次は、きやるの右腕に回転式の銃器が現れた。

「レイジングハート」

『アクセルシューター』

なのはが、誘導弾の用意に入る。そして、

「シュート！」

二人とも一斉に撃ち始めた。なのははシールドで防ぎ、キャラはバルカンで撃ち落とす。

しかし、このままだとキャラの不利である。

「（っ！そうだ！）バトルチップ《エアースチール》スロットイン！」

キャラの移動速度が上がる。

「シュート！」

しかし、なのはがアクセルシューターを飛ばし、迎撃に乗り出す。だが、

「フリード！」

キャラとなのはの間にフリードが出てくる。

「バトルチップ《サラマンダー》スロットイン！」

「きゅー！」

炎を纏ったフリードが、なのはのアクセルシューターを弾き飛ばしながら突進していく。

しかし、なのはは落ち着いて、シールドを斜めに展開してフリードの突進をそらす。

「・・・?! キャロは？」

見回すとキャラがいない。

「やー！ー！」

と、その時キャラがなのはの後ろから現れる、

「《インビジブル》解除！バトルチップ《ブレイクハンマー》スロットイン！」

石を削ったようなハンマーを持って。

『ラウンシールド』

レイジングハートがシールドを張るが、

パリーン・・・。

「っ?！うそ?！」

なのはのシールドはハンマーに触れた途端、粉々になりなのは地面にたたきつけられた。

「うわ~~~~!!」

しかし、キャロもそのハンマーが重すぎたのか地面に落ちる。

「レイジングハート！」

『ロードカートリッジ！バスターセット！』

「デイベイン！」

なのはは砲撃の準備をする、対してキャロは

「っ!」（もう時間もないし・・・これしかない!）《ショットガン》トリプルスロットイン！」

キャロの両腕と頭上に砲身が現れてキャロが両手を上にあげ三つを融合させる。

「プログラムアドバンス!《ハイパーバースト》!」

「バスター!」

キャロとなのはの砲撃がぶつかり、爆発した。

side フェイト

なんか、キャロがなのはとすごい勝負をして驚いている今日この頃

です……。

「……あれ？私でもあんなに弾幕張れないよ？……それになのはに近接戦で一発入れたし……。」

「……私、キャラに負けてる？……なんか、目から水が……。」

「……？テストロッサ、どうした？」

「……シグナム……。」

「……なんかキャラに負けた気がして……。」

「さすがにそれはない。」

「え？」

「確かに今の試合もルシエはなかなか良かったが、高町が手加減してるおかげだろう。」

「???」

え？……どういう、

「……はあ。おまえは気付かなかったのか？高町がなぜあんなにうごかなかったとをもう？」

「……あ。様子を見るため？」

「ああ、あと少しのハンデだろうな。」

なるほど！……キャラが心配で気付かなかった……。」

すると、立ち上がっていた土煙が消えて二人の姿が見えた。

「いやあゝびつくりしたよ。」

なのは少しバリアジャケットが汚れていたけど、無傷だった。

「……あうあ……。」

キャラはなぜかバインドで空中に固定されていた。

……ほんとに、おつかれさま。

side out

第三話「訓練と弾幕」(後書き)

(これからは、作者は「作」と書きません。)

くあとがき

いやあゝあっというまだね

ジャ「なにが、「あっという間」だよ。」

うるさい！まだまともに話してないやつが！

ジャ「お前のせいだろー！」

そうともいう。

ジャ「でも、今回はネタいっぱいだな。」

ちなみに今回ののは、

- ・ ロックマンエグゼ
- ・ 遊戯王
- ・ 機動戦士ガンダムW

だな。

ジャ「遊戯王とガンダム？」

遊戯王はバトルチップローダーの戦闘形態―（遊戯王の、デュエルするときにつけるやつ）、ガンダムはゼロウイング（ウイングガンダムゼロカスタムのやつ）がそうだ。

ジャ「なるほどな。で、次回は？」

いよいよアルバードが六課に出向！

ジャ「あれ？真央は、どうしたんだ？」

あの後、普通に帰った。

ジャ「そつかよ・・・。」

あつ、感想まってまゝす。

第四話「アルバード軍」(前書き)

ついに、アルバード軍のとうじょう！

第四話「アルバード軍」

ここは、機動六課のロビーである。そして、そこにはこの六課の職員全員がそろってる。

なぜこうなってるかというと、

ヒソヒソ

「なあ、どんな人達だと思うか？」

「さあな、わからねえ。」

「怖かったらどうしょ。」

「・・・そしたら、辞表書くかも・・・。。。」

「大丈夫だよ。・・・きつと。」

「時空管理局協力軍隊『アルバード』か。」

そう、今日あの『アルバード』が、ここ機動六課に来るのだ。

そんな中、ここにも噂をする者がいた。

「（ねえ、ティア。）」

「（なに、スバル。）」

「（『アルバード』の人達ってさ、私たちと一緒に闘ったりするのかな？）」

「（・・・そういえばそうね。）」

「（そういえば・・・。）」

「（ん？なあに、キャロ？）」

「（フェイトさんが、そんなこと言っていたような・・・。）」

「（そうなの？ちょっと楽しみ）」

「（そういえば、真央さんってアルバードでの役職は何なんでしょう？）」

「（・・・聞いてないわね。）」

「（どうなんで・・・あつ！来ましたよ。）」

すると、六課初日のように台の上に部隊長が立った。

「えー、今日からこの機動六課に出向してもらいました、アルバードのみなさんです。」

すると、入口からそろそろと人が入ってきた。

「今ここにいるのは、おもに六課フォワードメンバーと一緒に出勤してもらう人や、ここに顔を出す機会が多い人たちです。」

そして、はやてにかわり、一人の男性が台上がった。

「アルバード軍大将、ハルバードだ。まあ分かるだろうが、この軍の名前は俺の名から来てる・・・と、それはいいか、これから世話になる、よろしくな。以上。」

拍手が起こる。これにて終わりのようだ。

〈数分後〉

「真央さん！」

「ん？あ、スバル。それにほかのみんなも、三日ぶりだね。」

フォワードメンバーが、真央に話しかけていた。しばらく話すと、エリオが、

「あ、そういえば真央さんってアルバードでは、どんな役職なんですか？」

「あれ？・・・言ってなかったっけ。」

無言で頷く四人。

「・・・そうだなー、戦闘では自分の隊の指揮をしたり、前線に立つこともありますね・・・。普段は、管理局からの依頼を受けたり、教導もしますよ？」

「魔導師ランクは、いくつなんですか？」

ティアナが聞く。

「私は、SSのリミッター付きです。」

「あ、皆いた、ちよつとフォワード集合。」

と、なのはが呼び掛けフォワードが集合、それに向かい合うようにハルバードとほか数人がいた。

「おつ、来たか。それじゃ、自己紹介だそうだ。」

はい！と、ヴィータの言葉に答え、

「えつと、機動六課所属スターズスリー、スバル・ナカジマです！」

「同じく機動六課所属スターズフォー、ティアナ・ランスターです。」

「

「機動六課所属ライトニングスリー、エリオ・モンリアルです。」

「機動六課所属ライトニングフォー、キャロル・ルシエです。」

六課フォワードが言った後、金髪金眼の男性が出てきて

「・・・んじゃ、次はこちらか、アルバード軍大将兼、大将艦ブルーインパルス艦長ハルバードだ。・・・んでこっちは、」

すると、白い装甲をつけ、青い機械の羽をはやした、銀髪でアクアマリン色の瞳をもった女性が前に出た。

「ブルーインパルス所属航空部隊隊長、アシア・ブルカ・ファジヤール。気軽に『アシア』って呼んでね。」

次に前に来たのは、またもや背中に羽をはやした三人

「航空部隊所属ウィングツィ、イカロス・E・アルファーです。」

「同じくウィングスリー、ニンフ・E・ベータよ。」

「はい！同じくウィングフォー、アストレア・E・デルターです！」

次に来るは、先日会った黒髪赤眼の女性と、黒髪黒眼で羽の生えた女性、

「ブルーインパルス所属魔導師部隊隊長、佐伯真央です。みんなよろしくね。」

「魔導師部隊所属マジカルツィ、風音日和です。」

次は、金髪にエメラルドグリーンの瞳の人

「ブルーインパルス所属陸戦部隊隊長、マリ・ブラット。よろしく」

それに続くは、ピンク髪の女性、

「陸戦部隊所属ランディックツィ、ララ・サタリン・デビルークです。」

そうして少し皆でお話をする、しばらくすると馴れたのかフォワード達の緊張も解けたようだ。

「あつ、そうだみんな一回模擬戦しない？」

・・・ん？

「・・・そうだな、隊長人同士でやってみるか。」

・・・んん？

「あのー、一体どういう・・・。」

なのはが聞くと、

「いや、六課の隊長人の力量を見ようかということで、私たちアルバード隊長四名とそちらの機動六課隊長人四人で模擬戦をしようということですよ。まあ、親善試合とでもいいましようか？」

「「「「・・・え？」」」」

第四話「アルバード軍」(後書き)

「本日のお知らせ」

作「あとがきコーナーの模索中なので今日はありません。(礼)」
ジャ「次回「模擬戦? いやいや虐めでしょ?」」

第五話「模擬戦？いやいや、虐めでしょ？」（前書き）

久しぶりの投稿です！

なんかタイトルと違うような内容になってしまったような・・・。

でわ、どうぞ！

第五話「模擬戦？ いやいや、虐めでしょ？」

あ、皆さんこんにちは。なのはです。

え？なぜそんなに元気がないのっかて？

回想どろどろ。。。

訓練場

《六課側》

「……ふふふふ。」

「まあ、模擬戦をすることになってしまったのだからやるしかないだろう。」

「んで、やるからは勝とうぜ!」

「・・・そうだね、まずは作戦でもたてようか?」

まずはアルバード側を見る。

「まずはあのマリという者は、ナカジマのようなナックルとローラが付いてるから、フロントアタッカーで間違いないな。」

「真央は何も持っていないから、フルバックか?」

「アシエアさんは重厚な装甲だし、ライフルも持ってるからセンチガードかな。」

「ハルバードさんは剣と銃を持ってるから、ガードウィングだね。
・・・でも、」

「一番強いだろうな。」

なのはが頷く。

「・・・それじゃ作戦だけど、」

六課の作戦は、いたってシンプル。

まず、マリとアシエアを皆でいつせいに攻める、そのあとは、ハルバードをフェイトとなのはが、その隙にシグナム達が真央を倒しかつというものだった。

《アルバード側》

「・・・さしずめ向こうはまず、マリを倒しにみんなで来るな。」

「えゝ。やだなゝ、ねえ真央ゝ代ろうよおゝ。」

「はあ、仕方ないですねえ。」

「・・・あ、いつそさ・・・、」

どうやらこちらは何か仕組んでるようだ。

「えーと、それではこれより、機動六課隊長陣・対・アルバード軍隊長陣の模擬戦をします。」

（こんな挨拶ありましたっけ？）

（アルバードではするみたいだよ。）

皆が戦闘態勢に入る中、六課側が驚く。

（・・・?!予想と違う!）

アルバード側の陣形は、

《フロントアタッカー》：佐伯 真央

《センターガード》：マリ・ブラット

《ガードウイング》：アシエア・B・ファジャール

《フルバック》：ハルバード

だった。

「（ど、どうするの?!）」

「（・・・はあ、落ちつけテストロッサ、しかしどうしたものか・・・

。。）」

「（どのみち変わらねえ、さっきと同じようにするだけだ。）」

「（そうだね、皆行こう！）」

「はじめ！」

ティアナの合図で動き出すは六課チーム、皆が向かうは真央のところ、

「なるほど・・・一人ずつ倒していくという作戦ですか。」

「まあな。」

「悪いがな。」

「いえ、……でも、」

ゆっくり手を上に挙げる。

「そちらも覚悟をしてくださいね」

『ゲットセット。』

真央の腕に付いているブレスレットから音がする。

「フレイムアロー……」

そして、衝撃のものを見る……。

「……サウザントシフト！」

真央のまわりに、炎の矢が現れる……が、

「なんだ?!このバカげた数は!」

……その数、

「……言ったでしょ、1000発(サウザント)ってね。」

皆の顔が蒼くなる、……あんな数の魔力弾避けきれないと。

「……ファイヤ。」

『ファイヤ。』

しかし無情にも打ってきた。

「ちっ！アイゼン！」

『シュワルベフリーゲン！』

「レバンティン！」

『シュランゲバイゼン！』

「バルディツシュ！」

『プラズマランサー！』

「レイジングハート！」

『ディバインバスター！』

なのは達も決死の迎撃に当たる。

ズガガガガガガガガッ！……！！！！！！！！

〽回想終了〽

ということで、残ったのが私だけになったんですよー！！
・・・ホント、どうしょ・・・。

「ふう、こんなもので「アホー！」あいたー？！」

「相手はリミッター付きだぞ！しかも作戦と全然違うじゃねーか！
！」

といって、ハルバードさんが真央さんを銃の底で殴った。・・・大丈夫かな？

ただ、その時でした・・・。

「まあまあ、その辺にしなよ・・・」

アシエアさんの言葉に、私は驚くいた・・・。

「・・・ジャンゴ艦長。」

第五話「模擬戦？いやいや、虐めでしょ？」（後書き）

（結局次回予告のみになりました。）

次回「二人の再会」

第六話「二人の再会」(前書き)

・・・申し訳ございません。

すーく遅くなりました！！！！！

しかし、これからも遅くなりそうです・・・。

見捨てないでください！

こちら頑張ります！！

では、どうぞ！

第六話「二人の再会」

「えっ……。」

その言葉に、私は思い出す。

「あっあ……!」

あの人の事を、

「……あちゃ〜。」

「ん?どうした、アシエア。」

「えーといやー……。」「クイクイ

「ん?……ああ。」

そして、ハルバードがなのはに近づく。

「なのは。」

「……なの。」

「え?」

「本当に……ホントにジャン君なの?」

「……」

するとジャンゴは剣に手をかける。

「・・・いったい？」

「ふっ、こちのほうがわかるだろ？」

そして、剣を構えこう呟く、

「リミッターレベル1、リリース。」

『リミットリリース。』

剣から声がしたと思うと、すごい魔力がジャンゴからあふれてくる。

「真解。」

そして、燃え盛る炎が巻き起こる。

「焼き尽くせ！業火火焰龍！」

炎が消えると、そこには・・・

「・・・んじゃ、あらためて。」

赤眼赤髪で、

「久しぶり・・・。」

龍の形をした大剣を持った・・・

「なのは!」

ジャンゴ・フェニックスがいた。

「……………」

えーと……なんか取り残されてるのかもしれない、私フエイトです……。

「うつぐ………」

「シグナム!」

「・・・テストロッサか、やられたのか？」

「えっ、え〜と・・・。」

「?どうした。」

「あー、えつとですね・・・。」

〜フェイト説明中〜

「・・・つまり、あのハルバードがあ的事件のとき、高町を助けたと?。」

「うん、おそらくそうだと「アイツ!」って、ヴィータ?。」

いきなりヴィータが叫ぶと、二人のほうに行っちゃた・・・。

「・・・いいのかな?。」

「・・・まあ、なにかあるのだろう。」

「・・・はあ・・・。」

ふーむ、こんなに早く知られるとはな！。

「ねえ、ジャンゴ君。どうして今まで黙ってたの？」

ん、少し怒ってるか？

「いや、実は「お、おいおまえ！」ん？」

あや？ ヴィータも回復したか・・・。

「なっなんでこんなところに？」

・・・まさか、俺がハルバードだと気づいてない？

「（おもしろそうだ。）まあいろいろあってな、そういえばちゃんと名のつてなかな。」

「うう／／／／／。」

ちと、

「んじゃ、説明するか・・・。」

第六話「二人の再会」(後書き)

次回キャラクター設定。

キャラクター設定（前書き）

キャラ設定パート1です！

キャラクター設定

さあ、ようやくここまで来たので、キャラの設定を書こうと思います。
(ネタバレするかも。)
では、まずはこれから!!

ジャンゴ・F・ハルバード フェニックス

年齢：19歳

性別：男

外見：「僕らの太陽」の主人公ジャンゴがモデル。まあ、すこし？
大人っぽい。

性格：物事をよく考えるときと、全く考えない時がある。温厚な性格だが、切れたときは世界が終わるらしい。

好きなもの：平凡な時間・甘いもの・雑談・お菓子作り。
嫌いなもの：言うことを聞かない奴ら。

弱点：女性。

戦闘能力

体力：SSS+

魔力：EX

陸戦：SSS+

空戦：SSS+

総合：EX

武器：業火火焰龍（大剣）、天平電龍（砲撃槍）、氷牙水龍（矛）、
森羅万象（大槌）、黒天月光歌（鎌）、聖帝（剣）、と+

まあ、こんなところかな。

ジャ「・・・なんだこれ。」

おお！いつのまに！！

ジャ「さつきからいたわー！！！！つかこれは何だー！！！」

いやゝ、お前の武器、中二全開だな！

じゃ「・・・。（ガチャリ）」

えっ？！ちよつとま「問答無用！！」ぎややああああ！！！！！！！！

じゃ「・・・ふう、すつきり。（ピラ）ん？」

ー後は宜しく by 作者ー

じゃ「・・・次行くか・・・。」

アシエア・ブルカ・ファジヤール

年齢：16歳

性別：女

外見：「エレメンタル・ジェレイド」蒼の戦記」の主人公アシエアがモデル。（外見のみ）

性格：ザツクリとしているが、慎重に戦うタイプ。「エレメンタル」のアシエアと違い、機械音痴ではなくむしろ得意。

好きなもの：アイス、機械、運動

嫌いなもの：キモイ人、思い込みが激しい人

戦闘能力

体力：S

魔力：E -

陸戦：SS +

空戦：SSS +

総合：SS

武器：Gドライバー、と+

ジャ「俺より三歳年下かく、しかも魔力E - だし。」

ア「そうみたいだね・・・、ぶぶつ。」

ジャ「ん？どうした・・・げ！」

ア「弱点が『女性』って何？あっはっはっはっは。」

まあ、女性に対する抗体がないのよ、この人。

ジャ「あっ！おまえ！」

んじゃ、アシエアよろしく！

ア「えーと、次は真央だね。」

佐伯 真央

年齢：18歳

性別：女

外見：携帯電話ゲーム『ドキドキダジョン3』の主人公。若干性格が違う。

性格：優しく、おっとりしている。が、戦闘では巧みな槍術と頭脳戦を繰り広げる。

好きなもの：みんなで騒ぐこと、料理
嫌いなもの：・・・仕事

戦闘能力

体力：S

魔力：SSS+

陸戦：SS

空戦：SS

総合：SSS+

武器：バトルチップローダー、金剛画載（槍）

「お前……」

真「いいや違うんですよ！！・・・ちよつとその、手先がくるつて・・・。」

ガチャ

真「いつ、いやああああ——！！！」

ひ
ゆ
ー
ん

ド
ン

ち
ー
ん

逝つたな。

ア「……」合掌してる。

・
・
・
次。

マリ・ブラット

年齢：18歳

性別：女

外見：『遊戯王』のブラックマジシャンガール＋マジシャンズヴァルキリアって感じ。

性格：優柔不断、マイペース、わが道を行く、を信念にしている。ただ、自己中ではない。

好きなもの：お菓子、昼寝、模擬戦
嫌いなもの：特になし

戦闘能力

体力：SSS＋

魔力：SSS－

陸戦：SSS＋

空戦：S＋

総合：S

武器：マテリアルチェンジャー（ベルト）

マ「私と真央は、『＋』ないの？！」

何て言うか・・・フェイトの『真・ソニック』的なものがあるよ。

マ「なら、いいや。」

ア「それはそうと、あれはいいの？」

真「あうあう・・・。」

プスプス

ジャ「まあ、いいでしょ。」

真「お、鬼……。」

ジャ「黙れ魔王。」

マ「そういえばさ、思ったことがあるんだ。」

なに？

マ「魔導師と陸戦部隊の人って少ない？」

ア「あ、それは思った。」

ジャ「そこら辺はどうなってんの？」

ちゃんと決めてるよ？魔導師は言えないけど。

マ「じゃあさ、陸戦教えてよ！」

陸戦はね、非魔導師で構成されてるから、小隊がたくさんあるの。

ジャ「つまりはなんだ？その隊の隊長を全部入れるより、司令官と

副官のみにした方が良いと？」

その通り！ちなみに、航空部隊は半分半分、魔導師部隊は一部を除いて魔導師のみで構成されてるよ？

ア「ふん、じゃあさ、魔導師の隊長人って最終的に何人になるの？」

真「あいたた・・・、それは私も気になります。」

マ「あつ！よみがえった！」

えくとね、真央たち以外にあと一人増えます。驚くよ？

マ「わい 楽しみ」

あつ、それに伴い自分独自の解釈が入るので、ご了承ください。

ジャ「残りのやつは？」

それはまた今度、それでは！

キャラクター設定（後書き）

次回、第七話「質問タイム」

第七話「質問タイム」(前書き)

ジャ「何故こうなった？」

言い訳にしかありません・・・。

ジャ「・・・言ってみな。」

部活の大会、学校のテスト、身内の不幸、ウイルス性の大腸炎の順です。

アシエ「・・・壮大だね。」

そんなわけでここまで遅れました。すみません。

真央「まあ、ある意味不可抗力なような・・・。」

第七話「質問タイム」

はやて「・・・どういう状況やこれ？」

なんや呼ばれた八神です。

スバル「あつ八神部隊長！」

はやて「スバルこれなんなん？」

これってゆうのは、このお菓子の方。

すばる「え」と、親交を深めるためとかで・・・。

スバル曰く、

なのはちゃんとハルバードさんが知り合いだった それについて説明すると言い出した せっかくなので気になることを言い合わない？となった 今に至る。

はやて「・・・なんや、そういうことかい・・・。」

ちなみに、このお菓子の山「駄菓子ではなく本格的な方、いわゆるデザートの種類」は真央さんとハルバードさんがつくったそうなの・・・すごいな。

ジャンゴ「おお、悪いな八神いきなり呼んで。」

はやて「いいですよ。あと、私の事ははやてって呼んでください。」

ジャンゴ「そうか、んじゃ俺の事もジャンゴと呼んでくれ。話し方も普通でいいよ、そっちは素じゃないだろ？」

はやて「えっと、ほなそうさせてもらいます。」

たまにはええやろ。

s i d e ジャンゴ

さて、みんな来たかな？

まあ、ハルバードの中にも知らない奴もいるしなあ

（説明中）

ジャンゴ「・・・と、言うわけだ。」

ティアナ「そんな事があつたんですね……。」

スバル「知らなかった……。」

そらそうだ、むしろ知ってた方がおかしい。

ジャンゴ「おお、そうだ。この際聞いてみたい事とかあるか？いいぞ。」

ほれっほれっとジェスチャーしてみた。

スバル「あつ、じゃあなのはさんを助けた時に使ったという大砲を見せてください！」

ん？あれか……。あれは《大剣》なんだが……

???「……私は、大砲ではないのだが。」

エリオ「うわっ?!しゃべった?!」

キャラ「これってインテリジェントデバイスなんですか？」

ジャンゴ「ん……正式にはこいつは《クロスデバイス》って言うんだよ。」

「……クロスデバイス?」「……」

フォワードがそろって首を傾げたな。

ジャンゴ「まあ、インテリとユニゾンを足して割った感じだ。」

はやて「ならその子も人型になるん？」

ジャンゴ「なるよ、クロスアウト《アゴン》」

剣を構えて俺がそういうと、下に魔方陣が発生し剣が形を変える。

???「・・・久しぶりですので変な感じがしますね。」

そして、炎のような甲冑を着た、紅の髪と瞳を持つ女性になった。

ジャンゴ「あ、ちなみに他にもあと五人いるぞ。」

キャラ「えつと・・・つまりデバイスを六つも使ってるんですか？」

ジャンゴ「ああ、キャラもやってみるか？いろいろ出来るぞ？」

キャラ「いついえ！・・・使いこなせる自信がありません。」

???「・・・主もあまり使わない者がいるような？」

そつ、そんなはずは・・・

???「そつだそつだ！私たいして使われてないぞ！」

???「まあ、私はいいけどね。」

???「・・・君は、よく使われるからだろ？」

???『ふん!・・・別にいいだろうが。』

???『あわわわ、皆さん仲良くな?あと、私も使ってくれと・・・いいな。』

・・・今度からみんな使うようにしよ。

ジャンゴ「皆出すか・・・クロスアウト《ポセイドン》《バルキリー》《ファラオ》《インドラ》《ゼウス》」

そして皆を出す。　ん?容姿をかけと?・・・次回で書くよ。作者が。

ジャンゴ「んじゃ、とりあえずアゴンから。」

アゴン「はい、我が名は業火、下名は火焰龍、真名はアゴン、よろしく願います。」

ポセイドン「俺の名は氷牙、下名は水龍、真名はポセイドン、真名は嫌いだから使うな。」

バルキリー「私は天平、下名は電龍、真名はバルキリー、私は真名で呼んでね」

ファラオ「ええと・・・私は森羅、下名は万象、真名はファラオです・・・よ、よろしくです。」

インドラ「私は黒天、下名は月光歌で真名はインドラだよ。」

ゼウス「自分はキングダム、下名をセイバー、真名はゼウスと言

ます。以後お見知り置きを。」

・・・よし！みんな啞然となってる！

ジャンゴ「まあ、こいつらとも仲良くしてくれ。大抵は人の姿だから。」

side all

ジャンゴ「ほれ、次はないか？」

なのは「・・・それならジャンゴ君達のほかのデバイスって見せてもらっていい？」

ジャンゴ「んゝ、いいけどなあゝ・・・」

すると、アシエアとマリを見てこう言った。

ジャンゴ「こいつらは、デバイスじゃないんだ。」

スバル「えっ？！・・・じゃあアシエアさん達もクロスデバイスを？」

アシエア「スバル実はね、私の魔力ってE - なんだよ。」

爆弾を落とした。

全員「・・・え？」

するとそこには赤い装甲を纏ったアシェアがいた。

アシェア「これが私のデバイス代わりのGドライバーだよ。^{ガンダム}」

マリ「ちなみにこれはね、陸戦と航空部隊のメイン装備だよ。」

はやて「・・・まるでアニメやな。」

フエイト「ついてゆけない・・・。」

なのは「あははは・・・。」

ティ&キャ「・・・。」

スバル「すごい!!」

エリオ「かつこいい!!」

フエイト「あれ？でも重くないですか？」

アシェア「ふっふっふ、これはね^{グラビティコントロール}重力操作っていう機能を積んでるから、服くらいの重さなんだよ。」

キャロ「・・・なんかすごいです。」

はやて「キャロの言うとおりや、ところでマリさんのはどうなんや？」

マリ「私は純血の魔女^{ウィッチ}だから、魔法形態も違うの。」

そして、腰のベルトを指差す。

マリ「で、これが私の武装マテリアルドライバーだよ。」

皆が「へ〜」となつてると、ティアナが聞いてくる。

ティアナ「そういえば、魔法形態が違つてどういふことですか？」

マリ「私たち魔女はね、ミッド式みたいに魔法プログラムを組んで魔法を「作る」って事は出来ないの。こっちの魔法は自然界にもともと存在する魔法を修行や精霊対話とかで身につけるの。」

キャロ「・・・なんか、大変そうです。」

マリ「まあ、古代ベルカ式みたいに先天資質に頼るんだけどね〜。」

ジャンゴ「つまり、この中で魔導師なのは真央だけだな。」

真央「そうですね、まあ私も魔導も魔法も使いますけど。」

はやて「いろいろあるんやな〜。」

そして夜は更けていく・・・。

第七話「質問タイム」(後書き)

マリ「ねえ、真央ちゃんのデバイスは？」

ああ、それはまた今度です。

ジャ「なぜに？」

とりあえず実戦で出そうかと。

真央「近々戦うんですか私？」

・・・だいぶ後の予定。

真央「そんな・・・。」

いいじゃない、あなた多芸なキャラだもん(チートの意味で)。

「「「「え?」「」「」

と、言うことでこれからも頑張りまゝす。

「「「「どう言う事だー!!」「」「」

次回「いざ、海鳴へ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7466r/>

魔法少女リリカルなのは～神の化身～

2011年11月17日17時34分発行